

徳島の農村舞台・小野さくら野舞台春の公演鑑賞と
美人の湯“神山温泉”を楽しむバスツアー
2009年4月12日(日)
小野さくら野舞台と神山温泉四季の里

程よい梅酒の酔いで花咲か爺さんの歌唱指導

チャーターした小型バスは参加者22名を乗せて徳島に向かって高速道路をひた走っていた。土日の一般乗用車の通行料1000円解禁。バスはその恩恵を受けないばかりか、晴天に誘われて一般乗用車が殺到し高速道路が低速道路になるのではという懸念を吹き飛ばす様に、幸いに停滞の兆しはない。

バスの車窓から、新緑の髪に満開の桜をまるでピンク色の花簪のように飾った六甲の山並みを右手に眺めながら、左手に春霞に包まれいぶし銀のような輝きを放っている瀬戸内の海の輝きを楽しんだ。



バスが発車してまもなく冷えたチョーヤ梅酒の新製品「ウメシュゼリー」【チョーヤHPより：国産梅100%使用。よく冷やした後、10回ほど振って楽しむ炭酸梅酒ゼリー。ゼリー

にした時の水っぽさを解消するために約1.2倍の濃さの梅酒を使用。{当社発泡性梅酒比}。香料無添加の豊かな梅酒の味わいに加えて炭酸とゼリーの新しい食感とが楽しめる。容量：180ml アルコール分5%希望小売価格：168円】を配布した。

昨年熟塾の講座に登壇いただいたチョーヤ梅酒の金銅社長に、熟塾の毎月活動案内をメールでお送りしているが、いつも誰よりも早く出欠のお返事を律儀にいただく。たいていは、出張や先約があって残念、参加できませんとか、イベントへの熟塾の取り組み姿勢の寸評も添えて返信いただくので、私もそれにお答えしてメールを打つのだが、前回は「テレビで宣伝している新製品ウメシュゼリーがまだ近くの店頭に出ていないで、並べられるのを楽しみにしています」と返信したのを気にしていただいたのか、ウメシュゼリー1ダースをバスツアーのちょうど前日に送り届けていただいた。冷蔵庫でキンキンに冷やしてバスに積み込んだ。ジュースのようなスリムなスタイルに、思わず手渡されたらみんな缶をフリフリしはじめた。「ああ、もう飲んじゃった!」「飲みやすいねえ〜。」「梅酒とゼリーの新感触!」と一気飲みする人続出。しばらくすると、ほんのり桜色に顔を染める人もいて「ああ、やっぱりお酒やねえ〜。」とほどよくバスの揺れと梅酒の酔いを楽しんでいるうちに、明石大橋を渡り淡路島へ上陸!

パーキングのオアシスへの車線は家族連れなどで既に車の列が並んでいたの、混雑を避けて次のパーキングで休憩。再度バスに乗り込んだ参加者に、農村舞台で「紙芝居」を披露したいという希望で参加した鈴木常勝さんにマイクをバトンタッチ。さくら野舞台の小川事務局長の快諾も得て、1時からのスタート前に披露下さい

とのこと。鈴木さんの紙芝居を見るだけだと思っていたら、皆にも協力いただきたいとの事。【花咲か爺さん】の童謡を皆で歌ってください。♪裏の畑でポチが鳴く、正直爺さん掘ったれば、大判、小判がサクザクザクザク♪と歌唱指導。さらに終わりの歌も歌おうと「また会う日まで」の替え歌バージョンを練習。

【鈴木常勝(すずき・つねかつ)さん・プロフィール】

1947年生まれ。愛知県出身。大阪市立大学文学部在学中から街頭での紙芝居実演を始め、日本のみならず世界の子供たちに紙芝居を披露している。大阪市の住吉公園・長居公園・平野全興寺境内などで紙芝居を続けている。立命館大学などで教壇に立ち、講義で紙芝居を口演、鍼灸師としても活動中。著書に『メディアとしての紙芝居』(久山社、2005年)、『紙芝居がやってきた!』(河出書房新社、2007年)、『紙芝居は楽しいぞ!』(岩波ジュニア新書、2007年)などがある。



農村舞台の前座で紙芝居【離さんか爺さん】を披露

バスは徳島市街地のビルの群生地帯を抜け出て、一路山奥に向かってひた走る途中、四国遍路で「へんろ転がし」と言われたほどの急な坂道がある焼石寺へ上る分岐路を越えて、狭い旧道を通り抜け神山へ続く国道へと合流した。両側の枝垂れ桜はほぼ咲ききって若葉の簾のように風に靡いている。

駅の道「神山」で休憩。ここは地元の産品が並び、朝採りの「しいたけ」や「たけのこ」「ぜんまい」等の山菜や生花、手作りの惣菜や梅干が並び村の物々交換&情報交換のプラットホームにもなっている。神山は日本一のすだちの産地で、明治時代は木材の里としても賑わっていた。駅の道で暫く買い物をしたり、名物のジェラードを味わったりと暫し休憩。

更に山を入ると、「小野さくら野舞台」という旗を持った人を発見してバスは徐行。案内された上り口から木組みだけの鳥居をくぐり急な坂を歩いていくと修復された農村舞台の周りに既に沢山の人が既に集っていた。小川事務局長に挨拶し、前方の座布団席に案内いただく。



昼食は、村の婦人会で炊き出したチラシ寿司と蕎麦の実に地鶏や人参や大根やお芋などの根菜類を細かく刻んだ具沢山の郷土料理・蕎麦汁と道の駅で買った「桜餅」を味わった。

開幕は1時だが、12時40分に司会者に紹介されて熟塾のメンバーが舞台前に集合。

「紙芝居を披露しますので、みなさんも童心に戻って歌ってください。」と、鈴木さんに

バトンタッチ。まずは、車中で練習した「花咲か爺さん」を歌い、紙芝居にはアンパンマン風のお爺さんの登場!物語が始まった・・・裏の畑でポチが鳴き「ここ掘れ、ワンワン」で正直爺さんが掘ると大判・小判がザクザク、それを見ていた隣の意地悪爺さんがポチを借りて、何処

を掘るのか？と詰問するとやる気のないポチはこの辺りと指？挿したので掘ったけれども、ガラクタや蛇や野糞が出てきたので意地悪爺さんは怒ってポチの尻尾を持ってグルグルグルグル振り回すとかわいいポチが怖い顔して「離さんかぁ！爺さん！」と怒ったという「はなさ（ん）か爺さん！」の物語でした。チャンチャン！でお別れの歌 ♪また会う日まで、会える時まで、話の続きは教えたくない。それは内緒だから、それは秘密だから、ふたたび出会えるあしたを夢に見て。みんなで握手をして、みんなでさよならして、その時心は何かを話すだろう。その時心は何かを話すだろう また会う日まで ♪〜。と「また会う日」までの替え歌を合唱。



これは落語の枕の小話「花咲爺さん」をもじった「離さんかぁ。爺さん」。いかにも大阪発らしい紙芝居で、一応少しの笑いと拍手はいただいたが・・・「お後がよろしいようで…」でそそくさと客席に戻った。

農村舞台から飛び出した乙女たちの輪舞曲(ロンド)



幕が開くと、襖に描かれた年輪を重ねた老木に桜が咲き乱れていて、やがて静かにバイオリンの音が響くと次々と淡いピンク色のドレスを身にまとい、束ねた髪に結んだ薄い桜色のリボンをなびかせながら、小学生から高校生までの女の子たちが次々と舞台上に舞いながら飛び出てきた。

あすなろバレエスタジオの少女たちによる創作舞踊「花の輪舞曲（ロンド）」が演じられた。

童女から乙女へと青春真っ只中の彼女たちの真摯な眼差しは清らかで、まさに春に咲く桜のような初々しい輝きを持った柔らかな肢体を風と戯れる天女のように優雅に躍動させている。更に彼女たちの舞姿を飾るように、頭上の山桜の大木の枝から散華のように淡いピンク色の無数の花吹雪が春風が吹くたびに、はらはらと舞台

の屋根や、少女や観客にも舞い踊る。途中に前列の女の子たちが踊りながら、舞台の下にも舞い降りて、観客の目の前で舞うという演出もあり、神社の農村舞台の中から抜け出て春風と花吹雪と一緒に舞う桜の妖精と出会ったようで感動し、復活した江戸時代の農村舞台と野外での少女たちの舞い姿が絶妙にマッチしていたのにも驚いた。

命の縦糸と横糸を結ぶ農村舞台

春の日差しは心地よく、神社から後方を眺めると段々畑が這う様に山頂向けて広がり、新緑の中に桜の淡いピンク色がベールを覆うように山の中に民家が点在している。まるで桃源郷のような風景が広がっている。春だよと鶯が自慢の喉を競うように鳴きわたり、風を受けるたびにまだ幼い若葉たちが互いの身を重ねあってサヤサヤと山間に波のように爽やかな響きを放っている。雑踏の中の都会暮らしに慣れていると、かつて人々との暮らしと共にこの地にくりひろげられた普遍の営みがとても新鮮に神々しく、ゆったりとした心豊かな時間の流れを難じることができた。

戦後、高度成長期と共に物質的な豊かさを追い求めるがために見失った自然と共に生きた日本人の暮らしのリズムや祈りをも農村舞台復活と共に蘇っていた。人はパンのみには生きずにあらず、文化的な活動の中に人が人として今を生きていく大きな支柱が存在していたのに、拝金主義の流れに日本は心の支柱を失ってきたようにも思える。命の縦糸である伝統も、命の横糸である今を生きる人々のコミュニティが希薄になっているが、農村舞台は形として復活されたばかりでなく、かつての日本人の素朴な暮らしの中できっちりと結ばれていた命の縦糸と横糸を結びなおす力をも内在しているように思えた。

人形が魂を得て五穀豊穡を願う村に伝わる「式三番叟」

少女たちの若さ溢れる演技の後に、神山町に江戸時代から村人によって継承されてきた人生の大先輩が担う寄井座が舞台に登場。

先ずは「式三番叟」。人形遣い共々年季の入った一人遣いの人形がとても素朴な動きで先ず塩を撒いて舞台を清める。やはり農村舞台。ここは聖地。神社の境内、人形たちが魂を得て祝詞口調で五穀豊穡を祈る。

大阪の文楽は、小屋掛けで都市の中の限りある空間で演じられたので人形は小ぶりだが、農村舞台の人形浄瑠璃は農村舞台などの屋外で演じられることが多く、当然人形や演技や所作も大きくなる。文楽の興行を職業としてプロとして競い合うというよりは、農閑期の楽しみに村人が操る動きは当然アマチュアを脱しきれない。しかし今のような娯楽がない時代には人々の楽しみとして村々が競い合って人形や衣装や襖カラクリなどにお金を掛けた。

過疎と娯楽がテレビやラジオになってからは、農村舞台は忘れられていった。徳島でも、農村舞台と共に人形などが離散していくなか、神山町では人形は村人



によって伝承されてきた。他の村では農村舞台は再生したものの、肝心の人形の動きが伝承されず、大阪の文楽の技芸員を講師に招いて復活しているところもあるようだ。しかしそれは文楽を下敷きにしたものであり、かつて野外で演じられたものとはおおよそ異なるものだろう。更に、寄井座の人形の頭の多くが明治の名匠で、作家の宇野千代さんも絶賛した初代天狗久の頭（かしら）が舞台で現役で活躍し、人形たちの素朴な動きも郷土色豊かで興味深かった。

生写朝顔話（宿屋から大井川まで）の熱演に襖からくり



今回の演目は、蜚狩りで、ふと出会った男女が運命の壁に隔てられ政争の余波に翻弄される長い恋物語「生写朝顔話」より「宿屋」。

思う人を捜し求めて放浪するうちに盲目となった深雪が東海道、嶋田の宿屋で阿曾次郎と再会するが彼女の変わり果てた姿に動揺し同宿者の手前告げることもできず多額の金子と目薬を宿の主の徳兵衛に託して宿を出る。受け取った深雪はその人こそが曾次郎と気づき大雨の中大井川に駆けつけるが、既に川を渡った後で、更に大水で川止になり後を追うこともできず絶望した深雪は川に身を投げようとする。そこに深雪がかつて仕えていた大恩のある主人の息女と知った徳兵衛が駆けつけ、甲子（きのえね）生まれの男子の生き血で薬を飲むと眼病に効く事を知り自害。徳兵衛の犠牲を以って深雪の眼のみならず人々の前途に光明が差し込み、大内家の内紛の平定、駒沢と深雪の祝言という、長い年月の艱難辛苦の果ての恋の成就へと向かう物語が展開された。

1時間ほどの熱演に一汗書いた寄井座のメンバーと人形が並び幕の前に撮影タイム。

熟塾の参加者も舞台前を陣取って鑑賞記念にパチリ！最後は、またまた舞台の幕が開き、口上と共に襖絵の転



換についての説明があるが、ところどころ説明と舞台転換に時差？が、やがて襖が持ち上げられて次の襖が待機していて次の舞台へ転換するはずが、準備が間に合わず・・・慌ててた司会者が「ぶっけ本番ですから！幕を閉めて！」とご愛嬌。神山に明治時代に舞台で活躍した襖絵が二千枚も残っていて今回は徳島県からの補助も

受けて修復された襖も舞台上に登場。テレビも映画もない時代に、次々と襖が上下したり Denguri 返ったりと人力で動



けばまさにエンターテインメント。かつては舞台転換の速度やデザインを村と村が競い合っていて楽しんだそう。

「次回はもっとスムーズに動くように努力しておきます。からくりを近くで見たい方は、舞台へどうぞ！」という言葉が終了の合図だったのか、三々五々、席を立つ人、帰る人、舞台でからくりを見学する人などで客席に広げられたブルーシートが回収され、座布団が片付けられていく。舞台で忙しく説明する小川事務局長に挨拶をして神社の坂道を降りた。

さくら野舞台に寄贈した熟塾の桜と多津子さんの思い出

神社の入り口に立つ桜は、熟塾として寄贈した「枝垂れ桜」足元に【神山しだれ】と杭が打たれ、2月に大阪から移植されたのに嫁いだ娘のように神山の桜として根を張り新芽を出して枝先に名残りの桜の花がらを残していた。

小野さくら野舞台に熟塾が寄贈した桜を考えたのは、神山に熟塾を呼び寄せた会社の先輩の岩丸多津子さんだった。50歳で縁があり神山町に嫁ぎ、地元で溶け込もうと寄井座に入団したのが縁。80代を筆頭に長老が頑張る寄井座では50代は若手のホープとして活躍した。植樹祭で天皇陛下をお迎えする人形や、神山が二時間テレビドラマのサスペンスの舞台になったときも黒子ながら人形を操っていた。NHKのBSでの「お〜い、ふるさと日本・徳島」では人形の遣い方をテレビで解説。筆まめだったので、事あるごとに神山町についての便りを送っていただいた。

神山は日本で一番のすだちの産地で、2004年9月に熟塾で企画した一泊二日で寄井座の人形浄瑠璃を楽しみすだちとり放題ツアーではお世話になった。

また個人的にも一昨年バスでお遍路に出たときに、偶然昼食場所が神山温泉ホテルで、家がすぐ近くだからと駆けつけてくださった。気を利かせてくれた添乗員さんが参加者とは別に一階のレストランで話をするように手配してもらって私は遍路姿で面談した。ちょっと痩せたようだったが「なんだか体調が気になるので、徳島市内の病院で精密検査を受けてみるの・・・」とのこと。

まだ58歳の彼女だから、「念の為に診てもらった方がいいよねえ」と言ったものの、まさかその検査の結果が「癌」とは、思いもよらなかった。バスには、車中で遍路されている皆さんで飲んでねと「すだちジュース」を一ダース差し入れてもらった。冷えたジュースは美味しかった。その年もすだちが届いた。そしてほぼ一年、8月の暑い日に会社のOBの先輩から仕事場に電話が入った。「あのねえ。岩本さんが亡くなったんよ！」そろそろ徳島からすだちが届くと思っていたところで耳

を疑うような訃報にびっくりした上に、もう既に葬儀はおわったとのこと。受話器を握ったまま、呆然としていた。寄井座の一員として、先輩と同様に60代も70代も80代も元気で彼女は人形を操っているのだらうと疑うこともなった中での訃報だった。癌だと告知を受けてからも自宅療養を続け、「誰にも言わないで」と淡々として日々を送り二週間ほど入院しそのまま帰らぬ人となったそうだ。お見舞いにいけばよかった。せめて電話だけでも、声を聞きたかった。

前回の塾生のツアーで伺った時には、小野さくら野舞台、神社のご神体を取り巻いていた小屋も古く、襖絵からくりも修復中とのことでなんだか置き忘れられたような状態だった。「小野さくら野舞台が修復されたら見に来てね。」「ええ、きっと…。」約束は実現したが、多津子さんはこの世には居なかった。復興したさくら野舞台には楽屋もでき見違えるように蘇っているというのに…。



さくら野舞台に桜を
と思いついて、2月28日に塾生の池崎さんと奥様に造園業の後継息子さんと一緒に植えに行った。ち

ょうど舞台周辺を整備中で地元の方が桜の苗を植えたばかり、大阪から持ち込んだ5メートルほどある苗木を坂の上まで車で運べなかったの先に植えてあった苗木を坂の上の神社に上げて、小川事務局と池崎さん親子でさくら野舞台の入口に植え替えた。まだ春遠い2月の寒風にか細い裸の枝を揺らす桜の苗が神山の地に根を張ってくれるだろうか。神山からの帰り道、多津子さんの仏前にお参りに行った。仏壇の中の遺影ばかりがほほ笑んでいる。「神山の土になったんですねえ。」両手を合わせながら、最後に会った春の日に遍路姿の私を見送ってくれた多津子さんの笑顔と重なって人の世の無常を感じるばかりだが…桜は「へんろ道」と刻まれた石板が立つ路肩の石垣の上に遍路する人々を見守るように桜は立っている。まだか細いが何年かして根を張れば、春になれば歩き疲れたお遍路さんの疲れを癒すことができ

ような綺麗な花を咲かせてくれるだろうか…。いつかまたこの枝垂れ桜が咲く頃にさくら野舞台を訪ねてみたい。葉桜になった桜を囲んで写真を撮った。



満開の枝垂桜を眺めながらお風呂上りの神山地鶏定食

バスはもと来た道に戻って神山温泉ホテル四季の里についた。神山温泉ホテル四季の里に立ち寄る。神山温泉は天女が授けたと言われる霊水が湧出しており、塩辛く無色無臭で、数少ない貴重な塩泉としてとして有名。泉質はナトリウム塩化物・炭酸水素塩泉で、神経痛・関節痛・筋肉痛・冷え性・慢性皮膚病などに効果があり、何よりもお肌つるつるで「美人の湯」としても有名で、ここで1時間ほどの自由時間に、入浴する人、買い物する人それぞれに過ごした。

本当に、不思議だった。2年前に多津子さんと向かい合って眺めたレストランの川沿いの枝垂れ桜だけが満開だった。まるで私たちの来訪を待っていてくれたかのように見事に咲いていた。露天風呂からもお花見ができたが、お風呂上りにホテルの裏のつり橋辺りまで出ると、山の風が心地よい。



夕食は、レストランの窓越しに桜と向かいあうようにテーブルを円陣に組み、冷たく冷やしたグラスにビールで乾杯。柔らかな夕日に照らされている満開の枝垂れ桜を愛でながら名物の神山地鶏定食を楽しんだ。

神山温泉 TEL088-676-1117

5時半過ぎに神山町を後にした。バスはひたすらもと来た道をひた走る。少し時間はずしたため心配していた道路の停滞も切り抜け、9時に大阪駅に戻り、淀屋橋、難波、天王寺と参加者を送り届けて、バスは福知山まで帰っていた。



参加者：(敬称略)

一般：伊藤圭子・伊藤喜久子・角倉章・川村照子・木下奈美子・坂本フジエ・鈴木常勝・高木典子・田浦ちづこ・長崎彩子・森本小夜子

塾生：池崎宗男・大森史子・北原祥三・下野譲・原田彰子・浜田真弓・宮本雅彦・宮本麗子・森欣子・森川千世子・米川俊信